奇蹟の生還

笹井　重次

母が私を呼んでいる。何度も、なんども呼び続けている。返事をしようとしても声にならない。これは誰にでも夢によくある現象である。しかし私のこの場合は生死の境を彷っていた。起き上がろうとしても全身がしびれてまるで身動きが出来ない。目を開けようと思っても開かない。渾身の力をふりしぼってやっと右手で目をこすってみた。かすかに開いた目にうつったのは、その手についたどろどろとしたまっかな血のりのせいであった…。

私達の部隊というのは、対ソ戦に備え黒竜江の渡河を目的の任務で日頃から訓練をつんできた重工兵隊であった。昭和二十年八月九日の夕方の事です。一日の作業の汗をドラム缶の風呂で流していた私に、八面通で陣地構築作業中であった部隊本部から日ソ開戦の急報が入ったのです。牡丹江で新兵舎の設営にあたっていた兵と共に、戦場向け最後の列車に乗り込んだ。夜になって機関車の焚く火を目標に幾度かミグの攻撃を受けたが幸いムーリンで指令部の一部に合流する事が出来た。意外にもその時は既に敵の大型戦車に追いまくられ、後退も余儀なくされていたのです。

その司令部の勤務兵はS見習士官を長とした約五十名程だったと思う。昨夜乗って来た列車が最前戦から再び下って来た。S見習士官が割合に体の弱い兵と共にこの列車に乗ることになり二分して残り半分の強健な兵と私は徒歩で後退する任務を受けた。

負け戦さです。携帯食糧とて何一つの用意もなく出発したのである。八月の猛暑が照りつけ上衣に汗で白い地図を画いた様な模様が出来る。それがだんだんと大きくなる。目が廻る様な空腹がおそってくる。したたる汗をぬぐいながら凹地の水を取合って飲んだ。そしてひたすら歩いた。空からは餌を狙う鷹のように、敵機は乗った飛行兵の顔が見えるような低空で機銃を撃ち込んでくる。腹這いになって身を隠し再度出発しようとしたら人員が足りない。くたびれて水腹で寝てしまっている者もいた。こんな事をなんどか繰り返し、ふらふらの行軍が続いた。戦況は益々悪化して代馬溝から磨刀石方面へと逐次守備軍は縮まっていった。ここで列車で来たS見習士官と再び行動を共にする事になるのだが、もう夜も八時頃だったと思う。列車で着いた兵も銃撃を受けて相当な死傷者が出たと聞いた。歩いて来た私達の方が無傷だったとは…。

明けて十一日早朝兵をつれて山を下り、小さな谷川で朝めし焚きの仕度をしていた。その頃だった。山上に敵戦車が近づいたとS見習士官からの伝令が次々と来た。私達は朝飯どころではない。二㎞程の道のりを山上へとかけ登った……。

大東亜戦争も終結が近づいていたのでしょうか？当時の関東軍には、苦闘を続ける南方へ、精鋭といわれた兵力と共に、優秀な兵器が送りつくされていた。そのために飛行機なく、戦車なく、又敵戦車を攻撃する速射砲とてなく、肉薄で爆薬を抱いて体当りするより外なかったのである。勇敢というか、無謀というか、我が軍は迫ってくる敵戦車に向って肉薄攻撃で体当りを繰り返した。だが先のノモンハン事件で我が軍に多数の戦車を炎上、擱座

流れ流れて[illegible]船

ノ川恋し

作詞　笹井

いもやま

せやま

重次

世間話に[illegible]場

ゲート

作曲　作詞　北原　笹井

重次

勝